

地域活性化を目指す学生エンゲージメントの促進
—文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマⅣ
長期学外学修プログラム」の継続と成果—

Studies on Educational Methods to Strengthen Student Engagement
—Outcome of Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP) by
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT)

田島 喜代美

1. はじめに

2015年8月、浜松学院大学は、文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマⅣ（長期学外学修プログラム）」に採択された。地方都市は少子高齢化により地域コミュニティが衰退する一方で、地域のグローバル化、地方創生が求められ、めまぐるしく変化を遂げる時代の潮流のなかにある。その中で、地方大学は、地域の課題に応える社会イノベーションの創出とその担い手になる人材を養成することが求められている。

浜松学院大学は、長期学外学修プログラムの実施を通して地域をアクティブ・ラーニングの実践の場として、地域課題を題材としたPBL型（Project-based learning/ Problem-based learning）の協働学修を学習手法に取り入れ、地域人材の育成に取り組んでいる。本論文は、この長期学外学修プログラムの地域人材育成としての有効性について、学生がどのような変化を遂げているか明らかにする。

また本事業への参加学生の中には、長期学外学修プログラムのフィールドスタディにおける協働学修を通して、自らの学修を俯瞰的に捉え直し、創造的で独創的な学修活動へと深化させ、大学でデザインした正規のプログラムから発展させ、自ら活動を継続している学生がいる。その一方、長期学外学修プログラムの学びが一時的なアウトプットに留まり、その後の大学における学びにつなげることができない学生もいる。

2019（平成30）年度の長期学外学修プログラムの参加学生による学生市民団体（わたぼうしグランドデザイン）の設立により、大学の正規科目である長期学外学修プログラムと学生市民団体の活動を連携させ、新履修者の研修を行なったことは本プログラムの道行上、大きな転換となった。

本研究では、長期学外学修プログラムの履修修了者から構成される学生市民団体が、大学と連携しながら、新たな履修者を受け入れる体制や環境を創出し、活動の継続・発展を促進する循環型の学修モデルを構想し、その概念的枠組みを提案する。

2. 研究の背景

(1) 地方大学の背景と役割

日本が直面する少子高齢化が地方に及ぼしている課題の一つに、東京圏への転入超過があげられる。転入超過数はいわゆるバブル経済の崩壊後のピークである15万5千人（2007年）に比べると少なく抑えられているものの、依然として一極集中の傾向が続いており、2018年には13万6千人の転入超過（23年連続）を記録した（転出者数35万5千人に対し転入者数49万1千人）。2018年の東京圏の人口は3,658万3千人となり、全人口の約3割が集中しており、東京一極集中に歯止めがかかるような状況とはなっていない。東京圏への転入超過数の大半は若年層であり、2018年は15～19歳（2万7千人）と20～29歳（9万9千人）を合わせて12万人を超えている。地方創生を担う多様な人材を育成・確保し、東京一極集中の是正に資するよう、地方大学の振興、地方における雇用創出と若者の就業支援、東京における大学の新增設の抑制や地方移転の促進等についての緊急かつ抜本的な対策を、教育政策の観点も含め総合的に解決することが課題となっている。

(2) 浜松市の地域課題

浜松市は、首都圏と関西圏のほぼ中間に位置しており、市内都市部には世界トップクラスのものづくり技術を有する、輸送用機器・楽器・繊維の産業を基盤としたグローバル企業が集積しており、南部は恵み豊かな太平洋沿岸部、北部は広大な森林を抱える豊かな自然の山間部が広がり、そこには独自の伝統文化が受け継がれている。多様な資源を持つ浜松市は、人口約80万人（全国第16位）、面積1,558.06平方キロメートル（全国第2位）を有する静岡県最大の政令指定都市である。

豊かな資源を有する産業都市として発展してきた浜松市であるが、それに伴う大きな課題を抱えている。浜松市の北部に位置する北遠地域では、浜松市全域の65%の面積を占めるにも関わらず、人口は4%に過ぎず、高齢化や少子化による中山間地域の人口減少により、経済活動の低迷や担い手不足による耕作放棄地の増大、森林の荒廃、数百年もの間人々によって継承されてきた民俗芸能の衰退、さらには集落機能の低下など、地域社会の基盤を脆弱化させるなど多くの課題に直面している。

(3) 浜松学院大学のPBL型（地域課題）協働学習プログラム

現在多くの大学で、学生が主体的に学修するアクティブ・ラーニングが導入されているが、アクティブ・ラーニングという発想が生まれてきた背景には、従来の学習現場における「教員による一方向的な講義形式」の受動的学習による知識偏重型講義の批判からである。浜松学院大学のアクティブ・ラーニングの特徴は、地域課題にもとづく協働学修である。地域は多くの課題提示ができるアクティブ・ラーニングの実践

の場であると捉え、地域課題の解決に向けて取り組むことを目的としている。本学のPBL型協働学修では、履修者により構成される多様なグループメンバーが、同じ目標の達成のために共に活動する事を通して自己の学びを深め、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。本学では、地域課題を題材としたアクティブ・ラーニングを一般的な授業内でのアクティブ・ラーニングと区別している。アクティブ・ラーニングを一般的なアクティブ・ラーニング（知識の定着・確認を目的とした演習・実験等）と高次のアクティブ・ラーニング（知識の活用を目的としたPBL、創成型授業等）に分類する研究者もいるが、（谷口・友野 2011）浜松学院大学の地域課題にもとづくアクティブ・ラーニングは、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等一般的なアクティブ・ラーニングとは異なり、地域の特定の課題に取り組むことを通して、知識の活用や創造を目指す、高次アクティブ・ラーニングと言える。

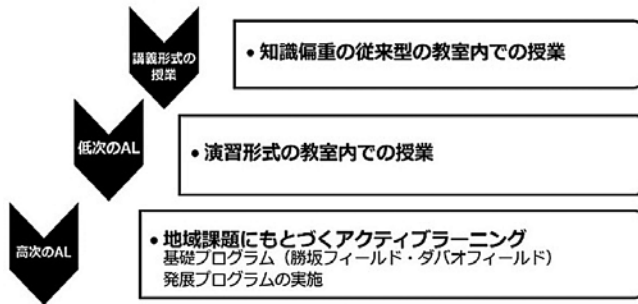


図1 浜松学院大学アクティブ・ラーニング

本プログラムは、高次アクティブ・ラーニングとして、協働学修を取り入れている。教員の介入に関しては稀であり、特定の場面に限られる。以下に、浜松学院大学が実施してきた地域ボランティアと本プログラム比較した。

	これまでの地域ボランティア	PBL型アクティブ ラーニング
プロジェクト	限定的な期間	継続性・持続性を重視
教員の学生の活動への関与	度々あり	ほとんどなし
課題設定・授業設計	教員主導	学生主導

図2 PBL型のアクティブラーニング比較

PBL型のアクティブ・ラーニングは、特定の期間に限定したプロジェクト（事前学修・集中・事後学修）の形式であり、教員からは活動の枠組みを示すことになる。履修者

には1人1台のiPadを1年間に渡り貸与し、事前学修・事後学修、フィールドスタディにおける全ての学修活動の記録、活動の評価のポートフォリオを策定した。また、プロジェクト形式での学修とし、フレームワークを使用することで課題について事実を論理的に整理し、履修者同士が共有し理解を深め、履修者の分析力や解決策に対する取り組みを可視化することで学修評価にも応用した。

3. 研究目的

本研究は、4年間実施してきた文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマⅣ長期学外学修プログラム」の学びを検証し、成果と課題を見出し、より教育効果が高く持続可能なPBL型協働学修の理論的な枠組みと新たな協働学修モデルを構築することを目的とする。

同時に、地域社会との連携強化による課題解決に取り組むことは、地域の大学が大学生を主体とした地域活性化のプログラムをデザインする際の一助になると考える。山田(2018)は、大学教育の質保証のためには、学生エンゲージメント¹を高めるアクティブ・ラーニングのような教育方法を導入することに加えて、教員によるエンゲージメントが必要であると説いている。教員が学生に対して学びに主体的な参加を用意することで、教員の教育力を高めることにもつながると指摘している。本研究では、「学生と教員が連携するエンゲージメント」を促進する概念的フレームワークを提案する。

4. 研究方法

2015年から2020年に実施した文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマⅣ長期学外学修プログラム」北遠フィールドスタディを実践研究として、PBL型協働学修アクティブ・ラーニングの学修モデルを検証する。これまで4年間の学修を振り返り、学修者の主体性と多様性を土台にして学びを広げ、深化させることで、主体的・対話的で深い学びを実現するために学びの構造転換を追求し、〈個別〉化と〈協働〉化が融合化する学びの在り方について研究する。

(1) 実践研究としての基礎プログラム

①事前学修期間

1ヶ月のフィールドスタディの活動に入るまでの学修期間として、フィールドに関する資料調査やゲストスピーカーによる講義に加え、フィールドスタディでの活動における個々のアイデアを可視化するためマインドマップ²等によるブレイン・ストーミングを実施した。

マインドマップは、多様なアイデアの創出を促し、履修者が互いに自由に提案することを尊重するグループワークである。また事前学修では「茶屋運営グループ」「イベント

企画グループ」「伝統芸能グループ」「畑作業グループ」「統括グループ」に分かれて活動を遂行し、各グループの役割および活動内容の差別化、組織化を図った。(参考資料1)

②フィールドワーク期間

PDCAサイクルシート（形成的評価）

プログラムの進捗の確認については、PDCAサイクルシートを活用した。受講生は週毎にPDCAサイクルシートを作成し、活動の評価および解決への改善を可視化し、課題を共有し成果をあげることを目的とした。フィールドスタディ期間中の学修活動を「過疎化する集落活性化の実現」を目指し、週単位ごとに作成したPDCA評価を用い活動の到達目標を検証した。勝坂茶屋の営業グループの2週目のPDCAサイクルシートを紹介する。(参考資料2)

③事後学修（総括的評価）

A) 社会人基礎力を指標としたルーブリック評価

茶屋運営グループ、イベント企画グループ、伝統芸能グループ、畑作業グループの各グループの活動は、「社会人基礎力」の3つの能力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」）のそれぞれの12の構成能力から、本フィールドスタディで最も育成したい能力として、主体性・課題発見力・発信力を選び出し、本学独自のルーブリックを作成して自己評価をおこなった。

表1 社会人基礎力の推移

	1年目	2年目	3年目
主体性	3.60	3.85	4.12
課題発見力	3.00	3.56	4.08
発信力	3.10	3.64	4.34

フィールドスタディ終了後の調査
1年目8名、2年目9名、3年目15名参加、5段階評価

中山間地域の大きな課題でもある、耕作放棄地の再生と活用に向けた課題発見と解決を、本プログラムの柱の一つとしている。「畑作業グループ」を例に考察してみると、フィールドスタディ実施終了直後に行った評価では、実施年度を追うごとに向上している³。

B) SWOT分析・SWOTクロス分析

フィールドスタディ終了後にフィールドで得た知見や経験から、これまでの個々の

協働学修活動の相互関係を明確化・整理し、履修者は「過疎化する集落の活性化の実現」を具現化する作業に従事した。プログラムの総括評価として、活動全体を俯瞰的に再評価することを目的とし、勝坂地域の活性化についての要件や機会を導き出し、外部環境・内部環境を分析する「SWO分析」及び「SWOTクロス分析」を用いた。ここでは、大学生による勝坂地域の「観光地域づくり」を目的として分析を行った、「SWOTクロス分析」から抽出した特徴的な活動企画を紹介する（参考資料3）。

(2) プログラムの成果と課題

①異質性に焦点を当てた協働学修モデルの構築

折出（2007）は、学習の現場において授業を集団機能として捉え、授業展開は課題達成機能と集団維持機能を高めることが手段であり目的であると指摘している。北遠フィールドスタディでは、担当教員が授業における課題達成機能と集団維持機能を高めるために、各年度のフェーズにあわせ、科目全体のコンセプトを決め、協働学修モデル⁴を提示する。協働学修を効果的に実施するためには集団内の異質性を最大化する編成が必要となる。履修者を活動の目的別にグループ化した協働学修の導入は、他の履修者との協働を通して、地域課題に対する解決への手段を多様なアイデアによる革新的な知の創出を期待した。⁵履修者は、与えられた地域課題の解決に対して各グループ毎に向き合い、地域の課題を取り巻く社会的文脈の中で実現性のある具体的な目的及び目的達成計画を策定する。

②成果

学生の自主的なPBL型の活動として、2019年には学生市民団体「わたぼうしグランドデザイン」を設立し、多様なステークホルダー⁶とのネットワークを深め・拡充している。彼らの活動は、北遠フィールドスタディのラーニング・アウトカムズ（学修成果）の一つである。

③課題

(A) 対人面での異質性の学修面への転換の困難

協働学修に取り組む集団においては、構成員の異質性は問題解決におけるパフォーマンスの向上に必要であることは述べた。集団における履修者が持つ異質性は、学修面において「問題解決への新たな視点の発見」や「革新的なアイデアの生成」につながることが期待される。しかし、長期学外学修においては、多くの場面において、集団を構成する構成員の異質性が「対人関係の葛藤」や「コミュニケーションの困難」を生み出し、学修成果への昇華を妨げになる事があった。

(B) 個人的な学問的な関心・興味を喚起できない

協働学修で得られた知識やスキルが個人的な学修活動に還元できなかった履修者もいた。協働的な学修活動においては、集団内で発揮する能力（規律性、柔軟性、傾聴力等）がより優先的に評価されて、個人的な学修活動として評価されにくいことが起因している。

(C) 少ない随伴経験（Experience of contingency）

地域の課題は政治的・社会的・経済的な課題でもあり、複雑な文脈の上にある。そのため、その課題解決に向けて個々の大学生が努力しても、それに見合うだけの具体的な成果につながる経験が多いと言えない。他者に関わるという行動の結果として、他者からも期待した結果が返される経験が重要であるが、参加大学生には十分な随伴経験が得られにくいことが窺われる。

(D) 自主活動組織の組織構造の脆弱性

「長期学外学修（北遠フィールドスタディ）」の長期学外学修履修者から学生市民団体「わたぼうしグランドデザイン」への移行は必ずしも円滑ではない。毎年プログラム修了後に「わたぼうしグランドデザイン」へ移行する履修者の意識・意欲は異なり、学年を超えたコミュニケーションを図ることが難しく、構成メンバー内の知識やスキルの共有や伝達が不十分であった。

5. 研究結果

(1) 新たな協働学修モデルを組み込んだ協働学修の概念的枠組み

多くの課題が顕在化したのが、長期学外学修プログラム終了後のアウトプットとそれを将来に活かし地域課題に対して発展的に取り組む活動（ラーニングアウトカム）の新たな協働学修モデルを組み込んだ概念的枠組みを提案する。

前述したように、PBL型協働学修により、個人的な学問的関心・興味を喚起できない履修者もいる。地域課題の解決を目的とした活動に結びつける、あるいは、個人的な学修にフィードバックさせる循環型の学びが求められる。個人の学問的興味を特定の地域課題解決への知識と結びつけ、個々の実践的な活動（アウトプット）や他者と協働しながら実践活動へと向かうなど、個人の学問的興味と協働学修を融合させながら、補完し合う学びが求められる。

図4は、個人の学修と地域における社会的な活動が循環する学びを実現する協働学修の概念的枠組みである。個人の学修と地域における社会的な活動との循環型な学びを実現する。

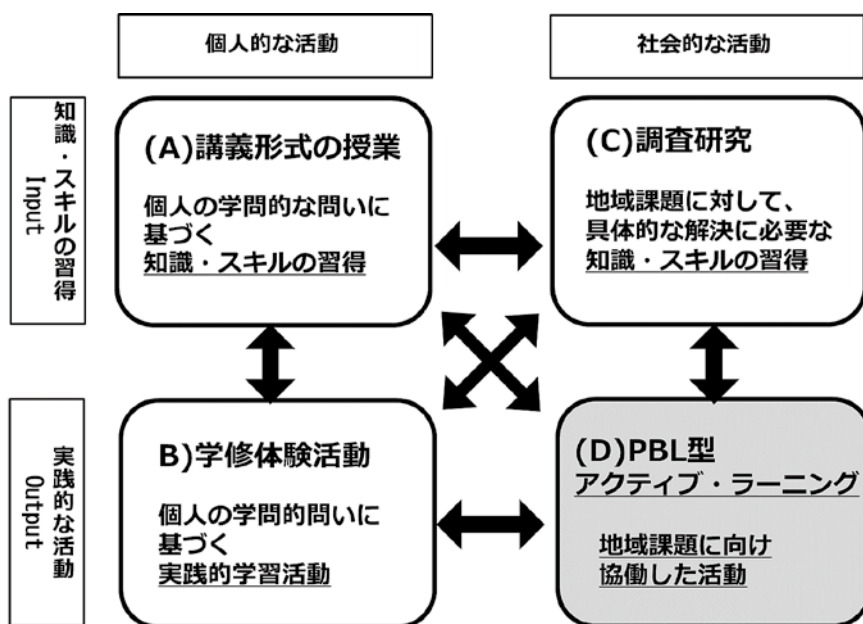


図3 協働学修の概念的枠組み

(A) 個人的・インプット

講義形式の授業：教員のペースで計画通りに正しい知識を均一に伝える一斉授業であり、学習の要点は教員が整理し学生に伝える。

(B) 個人的・アウトプット

学習体験活動：講義形式で得た知識やスキルに基づいて、学生個人の学問的興味関心により、地域で体験活動を実施する。

(C) 社会的・インプット

調査研究：講義形式で得た知識やスキルに基づいて、地域における調査活動等を実施し、地域の生活に関する情報やニーズを得る。

(D) 社会的・アウトプット

PBL型のアクティブ・ラーニングであり、地域課題の解決を目的とした活動を実施する協働学修である。

(2) 学生エンゲージメントを担保する学修モデル - 学生・教員のエンゲージメント（主体的・積極的参加）を促す実践共同体モデル -

浜松学院大学の正規科目である長期学外学修と学生市民団体「わたぼうしグランドデザイン」が連携し、履修者が地域課題の解決に向けてより主体的な関わりを実現する学修モデルの役割を構想した。長期学外学修科目を履修した学生は、大学がデザインした正規のプログラムから離れて、自主的に活動を継続している者たちが実践共同

体を形成している。実践共同体とは、特定の分野に関する関心や問題を共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団である。(Wenger, McDermott and Snyder 2002) メンバーは熟達度により重層的構造を成している。彼らはフィールドにおいて、新規履修者を新人として周辺の参加から受け入れていく。新規履修者は、実践共同体にも属している多重構成員性 (multi-membership) である。以下に、本研究における実践共同体に基づいた本学修モデルの特徴を挙げる。

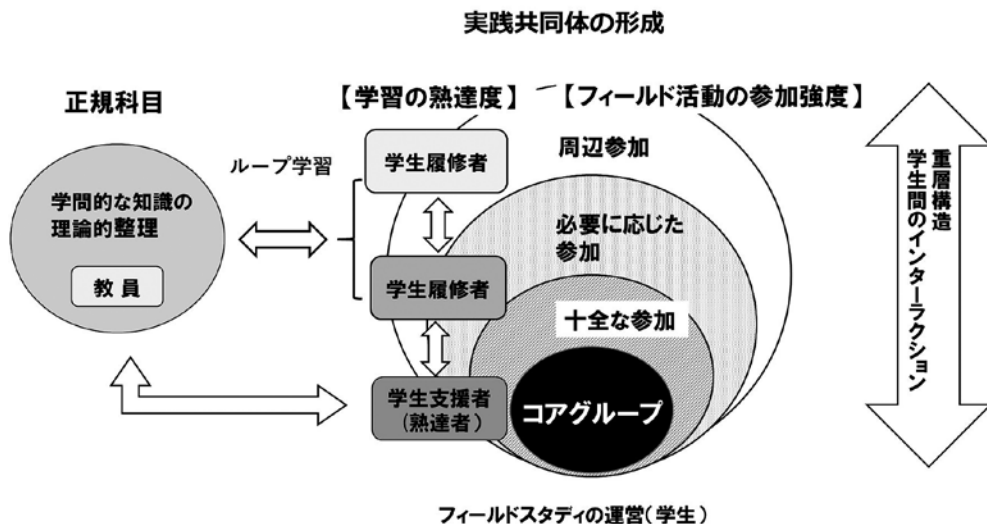


図4 学生・教員の学びのエンゲージメントを促す実践共同体モデル

(A) 循環的な学びの共同体

長期学外学修履修経験者の中から、熟達者を徐々に育成していく循環的な学びの共同体である。それにより、実践共同体の持続可能性を担保していく。

(B) ループ学習による高次学修

履修者は、正規科目と実践共同体の2の学習グループに所属することから、実践共同体において体験的に学んだ技能・知識を正規科目の中で、論理的且つ複眼的に検証することができる。履修者は、正規科目と実践共同体間のインタラクションにより学習を促進する。

(C) 反転授業 (flipped classroom)

一部の授業では、フィールドでの学びを主として、実践共同体の中核を担う大学生熟達者から、フィールドにおいて新人履修者へ知識やスキルを伝える。通常の授業は実践共同体で得られた知識や体験を基礎に、地域活性化の問題を論理的に整理し、有効な解決策を導き出す。結果的に、フィールドでの学びが「主」となり、通常授業が「副」となる反転化 (flipped) が見られる。

おわりに

Krause (2005) は、大学が提供する教育的な場や機会に積極的に関わる学生の行動（学生エンゲージメント）と学修成果との関係性を指摘し、大学在学中の学生の成長に対しては、学生のエンゲージメント（主体的・積極的参加）が大きな影響を与えると指摘している。

山田 (2018) は、大学教育の学修成果を得るためには、学生エンゲージメントを高める教育方法を導入することに加えて、教員によるエンゲージメント（教員自らが大学の提供するプログラムへの深い関与）も必要であると説いている。教員が学生の学びに主体的に参加することで、教員の学生への教育力を高めることにつながり、より学生エンゲージメントを高めるプログラムを提供できることになるからである。学生エンゲージメントを高めるプログラムを策定し、学生が多様な他者と深く関わることは、学生の社会的な成長促進と同時に学修成果に大きな影響を与えることになる。学生は、様々な対象（他者、自己、課題など）と関わりながら、自らの責任の下で選択し、主体的に行動することで成長していく。

本研究では、学生による実践共同体での学びと正規科目の学びを融合させた学修モデルを提案した。文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマIV（長期学外学修プログラム）」に参加した学生は、実践共同体においてさらなる学修を深化・拡充し、実践共同体を組織し、自主活動を通して多様なリーダーシップを示し、次年度に参加する学生の研修を担ってきた。ここでは、この学生による実践共同体を正規科目である長期学外学修プログラムと融合する学修モデルを紹介した。今後、地域の大学は地域の課題に取り組む際に、「学生と教員によるエンゲージメント」を促進するプログラムを提供する必要がある。

- 1 学生が主体的に学びに関わることで、教員と学生が信頼関係を築き学生の大学への帰属意識も高めていく。その過程で学生が成長するとともに教員も教育力を高め大学教育の改善も促進する。
- 2 マインドマップを活用して、受講者同士の持つ中山間地域に関する思考プロセスを可視化し、それらを分類し、ラベリングした。これにより、中山間地域の概念地図を作成が作成し、新たな知識を構造化して取り入れることを学修活動の第一歩とした。（参考資料1）。
- 3 1年目：耕作放棄地である荒廃した農地を整地する取り組みが中心となった。荒れ地が蘇生していくことは、目に見える成果と感じられ、農地を取り巻く状況を客観的に分析し柔軟に栽培方法を転換し、新たな方法を創り出すなど、「主体性 (3.60)」高い評価であった。一方、開墾を地域活性への具体的な解決に関係づける取り組みが不足し、「課題発見力 (3.00)」と評価した。
2年目：各プロジェクトに即した記述語（descriptors）を使用したルーブリック評価を導入した。これにより具体的な目標設定ができ、本フィールドスタディで最も育成したい能力として「主体性・課題発見力・発信力」を選び出し、達成基準を明確化した。

- 3年目：地域住民との交流を深め、地域に100年近く受け継がれてきた在来種の伝統野菜（「すみれ菜」「太きゅうり」「勝坂蕎麦」）の栽培に着手した。参加学生が、地域の伝統野菜の栽培と販売に誇りと愛着を感じ、「主体性（4.12）」「課題発見力（4.08）」は高い数値を示した。販路の開拓やSNSを取り入れた広報活動など「発信力（4.34）」も、高い数値を示す結果となった。
- 4 構成主義に基づく教育理論に基づき社会的な文脈や社会との相互作用を重視し、インプットからアウトプット（ラーニング・アウトカム）に焦点を当てた協働学修の活動を設定した。
 - 5 集団学習の構成員について、能力異質のグループの優位性を示し、異質性のメリットについて報告されている（Jonson, May & Whitne 1995）。
 - 6 天竜区春野町勝坂自治会や勝坂神楽保存会を構成する地域住民の他、JA 遠州中央、浜松市天竜区春野町協働センター、浜松市役所市民部市民協働・地域政策課中山間地域グループ、浜松市天竜区役所、春野町の企業NPO等多様な組織・団体等

引用文献

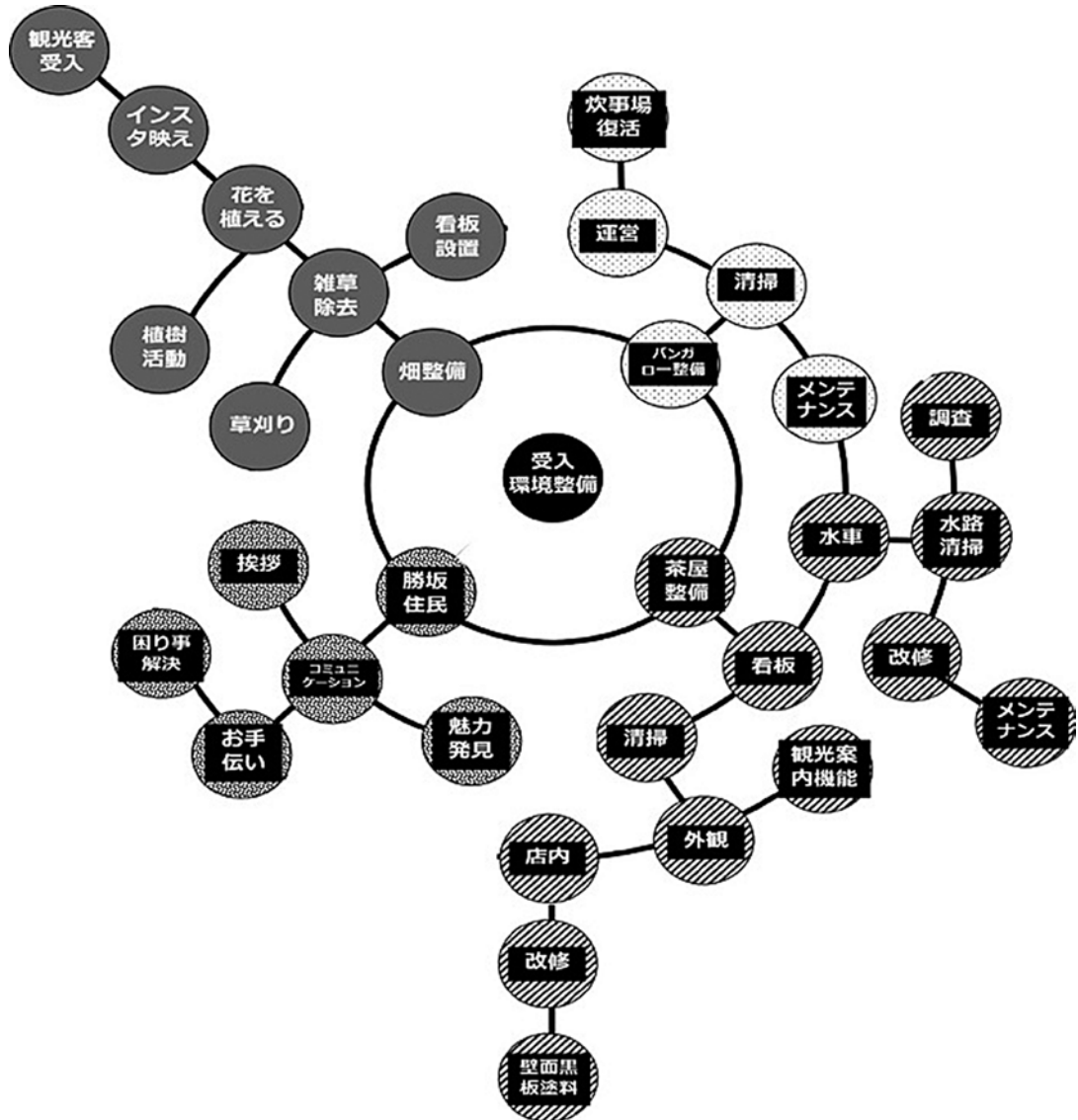
- 石井英真（2004）。「改訂版タキソミー」における教育目標・評価論に関する一考察：パフォーマンス評価の位置づけを中心に『京都大学大学院教育学研究科紀要』, 50, 172-185.
- 友野清文（2016）。「Cooperative Learningと Collaborative Learning」昭和女子大学『学苑』, 907, 1-16.
- 福嶋祐貴（2018）。「協働的な学習に関する類型論の到達点と課題 –協同学習・協働学習に基づく実践の焦点化と評価のために」『京都大学大学院教育学研究科紀要』, 64, 387-399.
- 山田剛史（2018）。「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』, 18, 155-176.
- 山田剛史（2018）。「学生エンゲージメントが拓く大学教育の可能性～改めて『誰のための』『何のための』教育改革かを考える～第3回大学生の学習・生活実態調査報告書」『ベネッセ教育総合研究所』, 31-39.
- 谷口哲也、友野伸一郎（2011）。「河合塾からの「大学のアクティブラーニング」調査報告—4年間を通じた学習者中心のアクティブラーニングについて—」『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか』河合塾編著 東信堂.
- Amabile, T. M. (1996). *Creativity in context: Update to the social psychology of creativity*. Hachette UK.
- Krause, Kerri-Lee. (2005). *Understanding and promoting student engagement in university learning communities*. The University of MELBOURNE.
- Wenger, E., McDermott, R. and Snyder, W. M. (2002) *Cultivating Communities of Practice*. Boston, MA: Harvard Business School Press. (野村恭彦監修・櫻井祐子訳)

[2002] 『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな 26 No. 639/
October 2013 知識形態の実践』 翔泳社)

- 第7回地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議 (2017). 「地方創生に資する
大学改革に向けた中間報告」. 内閣府. [https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/
meeting/daigaku_yuushikishakaigi/h29-07-26-sankou1.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/daigaku_yuushikishakaigi/h29-07-26-sankou1.pdf) (閲覧日:2019年4月1日).
内閣官房「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」(2019). 「地方における若者の修学・
就業の促進に向けて—地方創生に資する大学改革—」『平成29年12月8日地方大学
の振興及び若者雇用等に関する有識者会議 最終報告』[https://www.kantei.go.jp/jp/
singi/sousei/meeting/daigaku_yuushikishakaigi/h29-12-08_daigaku_saishuuhoukoku.
pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/daigaku_yuushikishakaigi/h29-12-08_daigaku_saishuuhoukoku.pdf) 浜松市中山間地域復興計画 (2015).
「みんなでやらまいか宣言!」[https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/shiminkyodo/
tyusankan/documents/cyuusannkannchiikishinnkoukeikaku.pdf](https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/shiminkyodo/tyusankan/documents/cyuusannkannchiikishinnkoukeikaku.pdf) (閲覧日:2015年4月
1日).

参考資料

(1) マインドマップによるフィールドワークの可視化



(2) PDCAサイクル

勝坂茶屋の営業グループ

PLAN2 2017/8/7-13			DO(活動の実施状況)							
活動項目	活動内容	日								
		8月7日	8月8日	8月9日	8月10日	8月11日	8月12日	8月13日		
A	茶屋の片付け	引き続き清掃 (店内ショーケース、蛍光灯、水車)		清掃 17:00~ 18:30 全員					茶屋の改修 20:00~ 21:00	
B	メニュー開発	感想を聞きながら改良	試作 9:00~10:00 野栗・仲村		感想を聞く 11:00~ 13:00	言い出し 15:00~17:00				言い出し 9:00~11:00
C	茶屋の営業	8月8日にオープンする		台風によりオープン先送り	プレオープン 11:00~ 13:00	オープン 11:00~16:00			営業 11:00~16:00	営業 11:00~16:00
D	メニューの制作	メニューを作り直す。							メニューの制作 16:00~17:00	メニューの制作 15:00~16:00
E	宣伝	ブログなどを通じて宣伝する (ポスティング、マップづくり)		ブログでの宣伝	ブログでの宣伝	チラシのポスティング 9:00~11:00				
J										

ACTION (計画の改善)		
変更する内容	見直し の 重要度	改善に向けた方法と手段
A ショーケース、水車	高	ショーケースの使い方、水車を動かす
B メニューの開発	低	何か要望があればいい期待に添えるようにする
C 営業	低	引き続き決まった曜日に営業する
D メニューの改良	低	メニューの変更がない限り、そのままのものを使う
E 宣伝	中	引き続き宣伝活動を行う

CHECK(活動評価)		
目標	達成状況	評価の根拠
A	4	ショーケースの活用方法の見直し
B	4	来店してくださったお客様に美味しかったと言っていただけ。大盛りの注文に対応できなかった。
C	4	台風の通過に有利、オープンが延期になった
D	5	新しく写真などをつけ、情報などをプラスできた
E	5	地域住民の家にポスティングをしに行ったり、ブログでの宣伝ができた

(3) 「SWOT分析」及び「SWOTクロス分析」

SWOT分析

	プラス要因	マイナス要因
内部環境	強み-Strength- A. 文化（市の遊休施設（茶屋・宿泊施設） B. 勝坂神楽）と歴史（勝坂砦、神の水） C. 自然（気田川、明神峡、龍頭山、星）がある 2. 観光地域づくりが目的の、学生地域活動のプロジェクト授業、大学生が自分で発想、新しい視点を活用 3. 定住外国人大学生が在籍している。	弱み-Weakness- 1. 大学生の組織の脆弱性 2. 大学生の地域課題に対する意識の低さ 3. 大学生の長期的・持続的な取り組みが困難 4. 上の学年の知識・経験を、下の学年へ伝達することの難しさ 5. 学生の経済的な負担 6. 時間のやりくり（授業、バイト、自動車学校）
外部環境	機会（チャンス）-Opportunity- 1. 地方創生へ（平成30年浜松DMOの設立） 2. 浜松市がSAVOR JAPANに認定（食と農の地域ブランド推進事業） 3. 定住外国人が多く潜在している。 4. 自治体の中山間地域の活性化支援 5. 自治体の無形文化財の保護 6. SNSの活用	脅威-Threat- 1. 勝坂までの交通アクセスが悪い。 2. 高齢化する住民 3. 若者が流出（仕事がない） 4. 浜松市の遊休施設が多い。 5. 勝坂地域には、耕作放棄地が多い。 6. 勝坂地域には、空き家が多い。 7. 勝坂地域は、観光地としては全くの無名 8. 地域経済の衰退

SWOTクロス分析

	内部環境			
外部環境	機会（チャンス）-Opportunity- 1. 地方創生へ（平成30年浜松DMOの設立） 2. 浜松市がSAVOR JAPANに認定（食と農の地域ブランド推進事業） 3. 定住外国人が多く潜在している。 4. 自治体の中山間地域の活性化支援 5. 自治体の無形文化財の保護 6. SNSの活用	強み-Strength- 1. 勝坂には、多様な観光資源がある。 A. 文化（市の遊休施設（茶屋・宿泊施設） B. 勝坂神楽）と歴史（勝坂砦、神の水） C. 自然（気田川、明神峡、龍頭山、星）がある 2. 観光地域づくりが目的の、学生地域活動のプロジェクト授業、大学生が自分で発想、新しい視点を活用 3. 定住外国人大学生が在籍している。	弱み-Weakness- 1. 大学生の組織の脆弱性 2. 大学生の地域課題に対する意識の低さ 3. 大学生の長期的・持続的な取り組みが困難 4. 上の学年の知識・経験を、下の学年へ伝達することの難しさ 5. 学生の経済的な負担 6. 時間のやりくり（授業、バイト、自動車学校）	
		強み×機会 1. 自然を活用したツーリズム 2. 勝坂地区での伝統野菜を活用したツーリズム 3. 勝坂神楽を活用した伝統文化ツーリズム 4. 定住外国人学生による母語で発信しインバウンドの促進	弱み×機会 1. NPOを設立する。 2. 中山間地域をテーマとした学生主催のシンポジウムを実施する。 4. これまでの経験をまとめて、整理する。 5. マニュアルの作成、活動を組織化する。 6. 伝統野菜の商品販売により、活動資金を確保する。	
		脅威-Threat- 1. 勝坂までの交通アクセスが悪い。 2. 高齢化する住民 3. 若者が流出（仕事がない） 4. 浜松市の遊休施設が多い。 5. 勝坂地域には、耕作放棄地が多い。 6. 勝坂地域には、空き家が多い。 7. 勝坂地域は、観光地としては全くの無名 8. 地域経済の衰退	強み×脅威 1. 交通の不便さを上回る自然の魅力をアピールする。 2. 市の使われない施設を活用する。 3. 耕作放棄地を活用する。 4. 空き家の再利用 5. 文化の継承者としての高齢者をガイドとして活用する。	弱み×脅威 1. つたての住民へのふるさとツアー企画 2. 市内都市部に移住した集落の若者を対象とした 3. ホームカミングツアーの企画 4. 集落の高齢者と市内都市部に在籍する大学生との懇談会の実施

1. 強み×機会 強みを活かして、機会を逃さない戦略	中山間地域の豊かな自然、伝統野菜、勝坂神楽を活用したツーリズムの実施、定住外国人学生によるSNSによる母語発信を浜松・浜名湖ツーリズムビューローと協同して実施する。
2. 弱み×機会 機会を生かして、弱点を強化する戦略	任意の学生市民団体をNPOに組織変更し、組織を強化する。また、学生間で集積されてきた経験や知識を整理し、メンバーと共有する仕組み作など学生組織の脆弱性を克服する意識が見られた。活動資金の不足については、伝統野菜の販売などによりを確保する。
3. 強み×脅威 脅威を逆手に取った差別化戦略	交通の便の悪さを克服したレンタルサイクル、トレッキングによるネイチャーツーリズム、の実施や市の遊休施設、空き家の利用など学生の視点から有効な観光資源として見直している。また、地域文化の継承者としての勝坂地域の高齢者をガイドや語り部として活用する企画が見られた。
4. 「弱み×脅威」 組織の弱みを生かして、脅威を逃げる戦略	かつて地域で生活し、廃校（現公民館）に通学していた住民を対象としてふるさと再発見ツアーや、集落を離れた若者を対象としたホームカミングツアー、興味・関心の低い市内都市部の高校生・大学生と集落の高齢者との懇談会、廃校（現公民館）を活用したイベントなど、学生組織の弱みを生かそうとする学生ならではの視点による興味深い企画が創出された。

(4) ルーブリック評価

畑作業グループ

	5	4	3	2	1
主体性	1 作物栽培や市民農園の運営を実施する意義を完全に理解した。 2作物栽培を計画通りに実施するために、自分の役割を完全に責任を持つことができた。 3作物栽培計画のために必要と考える活動を常に模索し、他のメンバーに働きかけた。 4作物栽培のために自主的に、栽培方法を提案し、栽培に貢献しようと思慮して積極的に取り組んだ。 5これまでの既存の作物栽培に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた運作物栽培や市民農園の運営方法を常に提案できた。	1作物栽培や市民農園の運営を実施する意義・目的は、理解できた。 2作物栽培を計画通りに実施するために、自分の役割を責任を持つことが多かった。 3作物栽培計画の目標を達成させるために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけた。 4作物栽培のために自主的に、栽培方法を提案し、栽培に貢献しようと思慮して積極的に取り組んだ。 5これまでの既存の作物栽培に大きな視点から必要と考えた新たな作物栽培や市民農園の運営方法を提案することが多かった。	1作物栽培や市民農園の運営を実施する意義・目的を理解しようとした。 2作物栽培を計画通りに実施するために、自分の役割を責任を持つ努力をした。 3作物栽培計画を達成させるために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけた。 4作物栽培計画の目標達成のために自主的に、栽培方法を提案し、栽培に貢献しようと思慮して積極的に取り組むよう努力した。 5これまでの既存の作物栽培に大きな視点から必要と考えた新たな作物栽培や市民農園の運営方法を提案することが少なかった。	1作物栽培や市民農園の運営を実施する意義・目的の理解は少なかった。 2作物栽培を計画通りに実施するために、自分の役割に対して責任を持つことが少なかった。 3作物栽培計画の目標を達成させるために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけることは少なかった。 4作物栽培計画の目標達成のために自主的に、栽培方法を提案し、栽培に貢献しようと思慮して積極的に取り組むことは少なかった。 5これまでの既存の作物栽培に大きな視点から必要と考えた新たな作物栽培や市民農園の運営方法を提案することが少なかった。	1作物栽培や市民農園の運営を実施する意義・目的を理解できなかった。 2作物栽培計画を成功させるために、自分の役割に対して責任を持てなかった。 3作物栽培計画の目標を達成させるために、必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけることはなかった。 4作物栽培のために自主的に、栽培方法を提案し、栽培に貢献しようと思慮して積極的に取り組むことはなかった。 5これまでの既存の作物栽培に大きな視点から必要と考えた新たな作物栽培や市民農園の運営方法を提案することがなかった。
課題発見力	作物栽培の現状と計画目標との間にあるギャップを見出し、目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化することができることができ、改善につなげることができた。	作物栽培の現状と計画目標との間にあるギャップを見出し、目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化することができることができ、改善につなげることが多かった。	作物栽培の現状と計画目標との間にあるギャップを見出し、現状が目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化できるように努力した。	作物栽培の現状と計画目標との間にあるギャップを見出すことが少なく、現状が目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化しようとするものが少なかった。	1作物栽培計画の現状と目標との間にあるギャップを見出すことが難しく、課題がぼんやり解つて、それをきちんと伝えたことができなかった。
発信力	同じ畑再生グループのメンバーの栽培方法に関する意向・考えをしっかりとくみ取りながら、自分の意見や意思を説得力を持って伝えることができた。	同じ畑再生グループのメンバーの栽培方法に関する意向・考えをくみ取り、自分の意見や意思を説得力を持って伝えることが多かった。	同じ畑再生グループのメンバーの栽培方法に関する意向・考えをくみ取り、一方、自分の意見や意思を伝える努力をした。	同じ畑再生グループのメンバーの栽培方法に関する意向をくみ取ることが少なく、さらに、自分の意見や意思を説得力を持って伝えることが少なかった。	同じ畑再生グループのメンバーの栽培方法に関する意向・考えをくみ取ることができず、自分の意見や意思を伝えることができなかった。

勝坂神楽の継承グループ

	5	4	3	2	1
主体性	1 伝統芸能の継承する意義・目的を完全に理解した。 2伝統芸能の継承を成功させるために、自分の役割（個々・全体の練習及び継承）に完全に責任を持つことができた。 3伝統芸能の継承のために必要と考える活動を常に模索し、他のメンバーに働きかけた。 4伝統芸能の継承のために自主的に練習方法などを提案し、練習に貢献しようと思慮して積極的に取り組んだ。 5これまでの継承に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた新たな練習方法及び伝統芸能の継承方法に関するアイデアを常に提案できた。	1伝統芸能の継承する意義・目的は、理解できた。 2伝統芸能の継承を成功させるために、自分の役割（個々・全体の練習及び継承）に責任を持つことが多かった。 3伝統芸能の継承のために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけることが多かった。 4伝統芸能の継承のために自主的に練習方法などを提案し、練習に貢献しようと思慮して積極的に取り組むよう努力した。 5これまでの継承に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた新たな練習方法及び伝統芸能の継承方法に関するアイデアを提案することが多かった。	1伝統芸能の継承する意義・目的を理解しようとした。 2伝統芸能の継承を成功させるために、自分の役割（個々・全体の練習及び継承）に責任を持つ努力をした。 3伝統芸能の継承を達成させるために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけるよう努力した。 4伝統芸能の継承のために自主的に練習方法などを提案し、練習に貢献しようと思慮して積極的に取り組むよう努力した。 5これまでの継承に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた新たな練習方法及び伝統芸能の継承方法に関するアイデアを提案することが少なかった。	1伝統芸能を継承する意義・目的の理解は少なかった。 2伝統芸能の継承を成功させるために、自分の役割（個々・全体の練習及び継承）に対して責任を持つことが少なかった。 3伝統芸能の継承を達成させるために必要と考える活動を模索し、他のメンバーに働きかけることは少なかった。 4伝統芸能の継承の達成のために自主的に練習方法などを提案し、貢献しようと思慮して積極的に取り組むことは少なかった。 5これまでの継承に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた新たな練習方法及び伝統芸能の継承方法に関するアイデアを提案することが少なかった。	1伝統芸能を継承する意義・目的を理解できなかった。 2伝統芸能の継承を成功させるために、自分の役割（個々・全体の練習及び継承）に対して責任を持てなかった。 3伝統芸能の継承を達成させるために、必要と考える活動を模索し、働きかけることはなかった。 4伝統芸能の継承の達成のために自主的に練習方法などを提案し、貢献しようと思慮して積極的に取り組むことはなかった。 5これまでの継承に捉われないこと、大きな視点から必要と考えた新たな練習方法及び伝統芸能の継承方法に関するアイデアを提案することがなかった。
課題発見力	伝統芸能の現状の習得と習得目標との間にあるギャップを見出し、目標達成を阻んでいる課題を常に可視化・言語化することができ、改善につなげることができた。	伝統芸能の現状の習得と習得目標との間にあるギャップを見出し、目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化することができることができ、改善につなげることが多かった。	伝統芸能の現状の習得と習得目標との間にあるギャップを見出し、現状が目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化できるように努力した。	伝統芸能の現状の習得と習得目標との間にあるギャップを見出すことが少なく、現状が目標達成を阻んでいる課題を可視化・言語化しようとするものが少なかった。	1伝統芸能の現状の習得と習得目標との間にあるギャップを見出すことが難しく、課題がぼんやり解つて、それをきちんと伝えたことができなかった。
発信力	伝統芸能の継承に関わる全員のメンバーの練習に対する気持ち、練習の方法等考えをしっかりとくみ取りながら、個々・全体の練習に対する意見や意思を説得力を持って伝えることができた。	伝統芸能の継承に関わる全員のメンバーの練習に対する気持ち、練習の方法等考えをくみ取り、個々・全体の練習に対する意見や意思を説得力を持って伝えることが多かった。	伝統芸能継承に関わる全員のメンバーの練習に対する気持ち、練習の方法等考えをくみ取ろうと努力し、一方、個々・全体の練習に対する意見や意思を伝える努力をした。	伝統芸能継承に関わる全員のメンバーの練習に対する気持ちをくみ取ることが少なく、さらに、個々・全体の練習に対する意見や意思を説得力を持って伝えることが少なかった。	伝統芸能継承に関わる全員のメンバーの練習に対する気持ち、練習の方法等考えをくみ取ることができず、個々・全体の練習に対する意見や意思を伝えることができなかった。

用語について
可視化：伝統芸能の継承の活動において、目標を阻む現状を正確に把握し、その原因を明らかにすること
言語化：伝統芸能の継承の活動において、現状を的確に言葉に表して他のメンバーに伝えること
課題発見力：現状の課題を可視化・言語化できる能力であり、PDCAサイクル回す能力である。